蔡京の科擧・學校政策

近藤一成

科擧制度が確立したとされる宋代、特に北宋では、多くの士大夫官僚によって科擧の在り方についての議論がなされた。それらを通觀すると、大要三つの時期が注目されよう。仁宗朝の慶曆から嘉祐年間、神宗朝の熙寧年間、それに徽宗朝の崇寧年間である。これらの時期の議論ないし改革の中心に位置する人物は、言うまでもなく范仲淹、王安石、蔡京であり、それら改革論議の基底には學校重視の指向が共通する。取士（科擧）と養士（學校）の一致は、建前論から言えば「聖賢の制度」の復活であり、また當時の「士大夫」政治の實情を勘案すればそれなりのリアリティーがあったと言える。この觀點からすると、三つの時期は、理想的な學校制が徐々に實現される過程となる。

政治家としての定見なく、立身出世と保身のための人氣取り政策に終始し北宋を滅亡に導いたと評價される蔡京と「理想」的な學校制度の實現、この奇妙な組み合わせをどのように理解すればよいのか。崇寧元年（一一〇二）の獻策から、天下三舍法の實施、宣和三年（一一二一）の突然の廢止までの經過を檢討しつつ、蔡京の科擧・學校政策の內容、實態とその社會的・學術的背景、廢止の理由について述べ、中國社會における理想と現實の問題について考えたい。

初期イスラム時代の私領地（ダイア）について

森本公誠

初期イスラム時代の土地所有形態について、これまで幾つかの研究がなされてきた。しかしながら、その大半はイスラム法上の土地範疇論に拘泥したり、初期イスラム時代に續く一〇世紀後半以降の、イスラム國家を規定する軍事イクター制への關心から、その制度の起源をさぐるという視點に重きを置いたりすることのために、眞にこの時代の土地所有の實態の把握にかならずしも成功しているとは言えない。またその主張に疑問の點も多い。そこで、アッバース朝時代、イスラム帝國全體に及ぶ規模で、しかも特權階級によるばかりでなく、「中間社會層」を生み出すほどにまでなる私領地（ダイア）所有の一般化現象に視點を置きながら、初期イスラム時代における私的土地所有の展開について述べてみたい。

Ⅰ　征服地における私的土地所有の起源
Ⅱ　ウマイヤ朝期の農地開發と大規模私領地經營
Ⅲ　アッバース朝期における私領地所有の一般化